

令和 5 年 5 月 1 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13369

研究課題名（和文）新出史料『吏文臚録』を利用した朝鮮燕行使の基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research on the exercise of the Korean swallow using the newly discovered historical material "Yimun Deungnok"

研究代表者

鈴木 開 (SUZUKI, KAI)

明治大学・文学部・専任准教授

研究者番号：80739425

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、16世紀末から17世紀初にかけて、朝鮮王朝と明朝中国とのあいだでやりとりされた外交文書集に関する基礎的研究である。これら外交文書は「吏文」と呼ばれる特殊な文体で書かれ、朝鮮王朝では「吏文臚録」として継続的に編纂が行われてきたが、現存するのは韓国学中央研究院蔵書閣所蔵の『吏文臚録』のみである。申請者はこの文書集の目録を初めて作成し、その構成を明らかにするのみならず、他史料との比較検討を通じて、その歴史的な価値について検討した。本史料の分析を通じて、朝鮮と明との関係について新たな光をあてることができるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではこれまでほとんど問題とされてこなかった朝鮮と明という二つの王朝国家の外交関係に光をあてるものである。両国間でやりとりされた外交文書をもとに外交関係を論じるという当然おこなわれてしかるべき研究であるが、これまでこうした研究は十分に行われてこなかった。外交文書は吏文という特殊な漢文の文体で記されており、歴史学のみならず、文学や言語学の分野においても意義あるものである。

研究成果の概要（英文）：This research is a basic study on diplomatic documents exchanged between the Joseon Dynasty and Ming Dynasty China from the end of the 16th century to the beginning of the 17th century. These diplomatic documents were written in a special writing style called "Yimun". In the Joseon Dynasty, "Yimun Deungnok" was continuously compiled. However, only "Yimun Deungnok," which is owned by the Academy of Korean Studies Jangseogak, is extant. The applicant has for the first time cataloged this collection of documents and clarified its structure. Furthermore, we examined its historical value through comparison with other historical materials. Through the analysis of this historical material, we will be able to shed new light on the relationship between Joseon and the Ming.

研究分野：アジア史

キーワード：壬辰戦争 燕行使 吏文臚録 事大文軌 朝鮮王朝 明 外交 明清交替

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、豊臣秀吉の朝鮮侵略後の朝鮮王朝と明朝中国の関係を具体的に知ることのできる新史料『吏文臚録』に対する基礎的研究である。本史料には膨大な数の外交文書が収録されているが、この時期の朝鮮と明、双方の事情があまり知られていなかったこともあって、その史料の価値が十分に認識されているとはいえない。そこで、『吏文臚録』所収文書のうち、特に朝鮮から明に派遣された燕行使に関係する文書の分析を行い、当時の朝明関係の具体像を明らかにすることとした。

## 2. 研究の目的

新出史料にして壬辰戦争から戦後にかけての朝明関係の重要史料といえる『吏文臚録』目録を作成する。今後の利用に供するため、すでに著名で目録も作成されている『事大文軌』など関連史料との比較検討も実施する。また未解明である朝鮮王朝における外交文書の編纂や保存システムについても、同時代の他史料と比較検討しながら考察を試みる。また実際に所収文書を読みとき、朝明関係史研究においてどの程度有用か、また利用に際しての注意点は何かについても判断材料となる事例を提示する。また収録文書の分類を試みることにより、朝鮮燕行使が持参した文書や、それら文書の役割などについても検討し、朝鮮燕行使の派遣制度の一端を明らかにする。

## 3. 研究の方法

『吏文臚録』には、韓国学中央研究院蔵書閣所蔵の原本と、そのPDF画像、東京大学所蔵の写真版という画像資料が存在している。一番アクセスしやすいのがインターネット上で公開されているPDF画像であったが、これはモノクロ画像であるため、判読不能な箇所がしばしばあるほか、空白のページが省略されたと考えられるなど、原本の情報を十分に反映していないものであった。そのため、本研究では上記三種を比較検討し、利用に当たっての注意点を鮮明にするようにした。以上の三種の比較検討のうえで、所収文書を利用した個別研究についても着手した。

あわせて、同じ朝鮮・明間の外交文書集である『事大文軌』などとの比較を通じて、『吏文臚録』編纂の背景についても究明することとした。また同史料を編纂した承文院や朝鮮王朝における公文書の編纂・保存という局面から『吏文臚録』を考察するため、年代記史料である「朝鮮王朝実録」や『承政院日記』についても、原稿本との比較を通じて編纂の様相をたどった。この作業を通じて、原史料がどのようにして成立し、それが記事としてまとめられ、歴史書の編纂へとつながっていくのかについて把握した。この作業は、王朝国家における歴史書の編纂と、原史料の保存の実例を探るうえで重要な意味を持つものとなり、また『吏文臚録』についていえば、朝鮮王朝にとって外交がどのような意味を持っていたのかという国家意識を探るうえでも重要な問いを惹起することともなった。

## 4. 研究成果

### (1) 『吏文臚録』所収文書目録の作成

『吏文臚録』に収録された文書のリストを作成した。現物や書式が残るものについては文書の種類を確定し、分類する作業もあわせて行った。頻出する明側の人物情報をリスト化し、所収文書の性格をより詳細に明らかにする作業も実施した。『事大文軌』との文書の重複状況についても調査をしたが、当初予想されていたよりは少なく、『吏文臚録』所収文書の重要性が浮かび上がる結果となった。また調査の過程で、『槐院臚録』や『国書草録』といった『吏文臚録』と同種と考えられる史料の存在を知った。このため、これら史料についても目録を作成し、所収文書の概要を把握するとともに、それらの成立の事情についても考察を行った。

最終年度には、史料所蔵先である韓国学中央研究院にて在外研究する機会にめぐまれ、『吏文臚録』など関係史料の原本を調査することができた。史料の現状と、公開されている画像資料にはいくつかの相違が認められ、原本参照の必要性を認識することができた。史料の現状については報告書として刊行した『韓国学中央研究院蔵書閣所蔵『吏文臚録』目録 附『国書草録』『槐院臚録』目録』(私家版、2023年)に「各冊解説」を執筆し、紹介に努めた。

### (2) 『吏文臚録』以外の朝明外交文書集の調査と研究

まず『吏文臚録』とはほぼ同時代に刊行された朝鮮・明間の外交文書集である『事大文軌』との関係について考察した。『事大文軌』は朝鮮王朝の対明外交姿勢を顕彰する目的で編纂されたものであるため、王朝政府にとって都合の悪い文書は採録されないという問題点が従来から指摘されていた。これに対して『吏文臚録』は実務用に編集されたものであり、史料価値が高いという見通しが得られた。こうした成果を壬辰戦争研究会において報告し、その際には個別文書研究の課題の一つに挙げていた壬辰戦争時に朝鮮側に投降した日本兵である「降倭」に関する文書を紹介した。壬辰戦争に関心を持つ日本、韓国、中国の研究者とも意見交換することができた。壬

辰戦争研究会における共同研究は川西裕也、中尾道子、木村拓編『壬辰戦争と東アジア』（東京大学出版会、2023年）として刊行された。

韓国学中央研究院蔵書閣所蔵の『槐院臚録』も重要な関連史料として浮上してきた。このため、所収文書のリストを作成し、史料の性格について分析した。その結果、これまでの研究では不明確であった文書総数を全1,075件と確定し、明清交替期の重要な歴史史料と評価されていた部分が、実は土族の文集史料に由来するものであり、その部分についての史料価値はそれほど高くないことを指摘した。『槐院臚録』の成立も17世紀半ばとする説があったが、実際には18世紀末であり、もともと承文院で継続的に編纂されていた「槐院臚録」とは性格をやや異にするものであり、そのことに注意して「槐院臚録」の編纂について論じる必要があることを指摘した。『槐院臚録』の史料価値としては、『事大文軌』や『吏文臚録』では欠けている年次に発給された文書の内容を部分的に知ることができるということがあり、そうした補助史料として利用していく必要があることも指摘した。

さらに、『槐院臚録』と『吏文臚録』が1800年に朝鮮漢城の昌徳宮内にもともに保存され、両者がどのようにして現在の韓国学中央研究院で保存されるにいたったのかについても、登録番号や整理票の記載をもとに初歩的な調査を行った。『事大文軌』の影印出版に代表されるように、朝鮮総督府は朝明外交文書集に相応の注意を払っていたにもかかわらず、『吏文臚録』などが見過ごされ今日に至っているわけだが、その問題についても一定の示唆を得ることができた。こうした史料の伝来という面についても今後検討が求められる。

### (3) 個別文書の研究

個別文書の研究では、清の太祖ヌルハチ名義の文書や関連する朝鮮・明間の外交文書を抽出し、研究した。関連文書は同時代に朝鮮で編纂され出版された『事大文軌』にも収録されているが、『吏文臚録』の方が現場に近い重要な文書を収録していることが分かり、両者の関係性を知る一助となった。またヌルハチ名義の文書は必ずしも明の外交文書とは言い切れない面があり、『吏文臚録』を単に明・朝鮮間の外交文書集とのみみることには慎重になる必要があるといえる。

また壬辰戦争中の朝鮮と明の間の境界紛争について、『事大文軌』『吏文臚録』所収文書を利用して研究した。当該テーマはこれまでもいくつかの研究が発表されてきたが、これら外交文書は利用されていなかった。この研究によって、「朝鮮王朝実録」などからは知りえなかった事情を明らかにすることができ、これら史料の有用性を示すことができた。本研究は「義州中江をめぐる朝明間の立碑問題」（『明大アジア史論集』27、2023年）として発表した。

なお研究期間中に韓国でも『吏文臚録』所収文書を利用した論文が相次いで発表された。本研究ではそれらの成果も吸収するよう努めた。

### (4) 朝鮮燕行使研究

燕行使研究の一助として、清の太宗ホンタイジによる第二次朝鮮侵略に関する資料である『南漢日記』の資料調査も実施した。資料内容は、清に対する燕行使派遣開始の事情を記した貴重なものであり、『吏文臚録』とあわせて分析することで16世紀末から17世紀前半までの燕行使の制度や実態の推移を明らかにすることができる。と同時に本資料も『吏文臚録』と同じく朝鮮王朝政府による公的記録であり、本資料の分析を通じて王朝政府の資料編纂体制や実務状況を明らかにすることができる。

朝鮮燕行使に関連する文書の概要を示しつつ、その意義について概説した。まず各種基礎資料や燕行録を参照して1591～1621年における朝鮮燕行使の派遣実態を明らかにした。この過程で、「燕行録」のデータベースを参照する必要があるため、「KRpia 燕行録叢刊6次改正増補」を次年度の研究費を前倒しで使用して購入した。そのようにして明らかにした燕行使の派遣実態を踏まえ、『事大文軌』と『吏文臚録』に収録されている関連文書から、燕行使が持参した文書の種類、使節団の規模が把握できることを指摘した。ここでも、『吏文臚録』の方が実務関係の文書を収録している割合が高く、史料価値が高いことを指摘した。また、朝鮮官僚の人名には明に対する避諱がなされていることを指摘した。

### (5) その他、研究動向整理

『吏文臚録』所収文書は「事大文書」とも称されるように朝鮮王朝の外交体制を形容する事大体制と密接な関係にある。このうち「事大」という言説の近代日本における変容を扱った『事大主義』という書籍が出版された。この書籍の検討をつうじて「事大」に対するイメージの変遷について知見を深め、『吏文臚録』所収文書が持つ現代的な意義を明らかにした。

また朝鮮王朝の外交体制について論じた研究書が刊行された。日本においてこうした専門書が刊行されることはめったにないため、その内容について詳細に紹介するとともに、研究史上の位置づけについて検討した。『吏文臚録』の史料価値を研究史上の文脈に即して明らかにする一助となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 鈴木開	4. 巻 131-5
2. 論文標題 2020年の歴史学界：回顧と展望 東アジア（朝鮮 高麗・朝鮮）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 251-254
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木開	4. 巻 59
2. 論文標題 書評 室井康成著『事大主義』（中央公論新社、中公新書2535、2019年）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 朝鮮史研究会論文集	6. 最初と最後の頁 285-298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木開	4. 巻 175
2. 論文標題 書評 木村拓著『朝鮮王朝の侯国的立場と外交』（汲古書院、2021年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 駿台史学	6. 最初と最後の頁 175-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木開	4. 巻 79 2
2. 論文標題 伝石之ニ（王＋行）撰『南漢日記』と李道長撰『承政院日記』 丙子の乱関係史料の基礎的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 58-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木開	4. 巻 なし
2. 論文標題 李舜臣	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 上田信編『侠の歴史』東洋編(下), 清水書院	6. 最初と最後の頁 228-243
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木開	4. 巻 なし
2. 論文標題 清朝の興起と朝鮮 清朝の対外関係の原型	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岡本隆司, 箱田恵子編『ハンドブック近代中国外交史: 明清交替から満洲事変まで』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木開	4. 巻 なし
2. 論文標題 朝清関係再考 冊封関係と宗属関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『歴史学フォーラム 2018の記録』歴史学フォーラム2018実行委員会	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木開	4. 巻 なし
2. 論文標題 「胡乱」研究の注意点	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『第3回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性 17世紀東アジアの国際関係 戦乱から安定へ』(SGRAレポート No.86) (公財)渥美国際交流財団関口グローバル研究会	6. 最初と最後の頁 89-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金賢善（鈴木開訳）	4. 巻 なし
2. 論文標題 明代湖南省の環境と疫病 通時的・空間的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 三谷博, 張翔, 朴薫編 『響き合う東アジア史』 東京大学出版会	6. 最初と最後の頁 47-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木開	4. 巻 27
2. 論文標題 義州中江をめぐる朝明間の立碑問題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明大アジア史論集	6. 最初と最後の頁 1～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 鈴木開
2. 発表標題 宣祖時代後半～光海君時代の朝鮮燕行使の派遣実態 『事大文軌』 『吏文謄録』 所収文書から
3. 学会等名 明清史夏合宿
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木開
2. 発表標題 蔵書閣所蔵『槐院謄録』と『吏文謄録』 壬辰戦争と朝明関係史研究の基礎史料として
3. 学会等名 壬辰戦争研究会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木開
2. 発表標題 伝石之三（王+行）撰『南漢日記』尊經閣本について
3. 学会等名 朝鮮前近代若手研究者報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木開
2. 発表標題 書評 室井康成著『事大主義—日本・朝鮮・沖縄の「自虐と侮蔑」』（中公新書、2019年）」
3. 学会等名 朝鮮史料研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木開
2. 発表標題 韓国学中央研究所蔵『吏文臚録』と壬辰戦争研究の可能性
3. 学会等名 壬辰戦争研究会（第3回）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木開
2. 発表標題 「華夷変態」前夜の明と朝鮮 1595年の朝鮮使節申忠一のマンジュ国派遣をめぐって
3. 学会等名 駿台史学会大会
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 鈴木 開
2. 発表標題 忘れられた関係 朝鮮・後金関係と「交隣」
3. 学会等名 九州大学韓国研究センター定例研究会
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 鈴木 開
2. 発表標題 蔵書閣所蔵『槐院臈録』と『史文臈録』
3. 学会等名 韓国学中央研究院蔵書閣古文書研究ワークショップ(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木 開
2. 発表標題 『史文臈録』中にみえる朝・明軍需関係文書
3. 学会等名 東国大学校文化学院HK+事業団学術大会「戦争と物資：軍需と物品で再照明する壬辰戦争」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 吉澤 誠一郎、石川 博樹、太田 淳、太田 信宏、小笠原 弘幸、宮宅 潔、四日市 康博	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学(担当部分：明清交替と朝鮮)	



1. 著者名 川西 裕也、中尾 道子、木村 拓	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 498
3. 書名 壬辰戦争と東アジア（共著，第8章担当）	

1. 著者名 鈴木開	4. 発行年 2023年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 167
3. 書名 韓国学中央研究院蔵書閣所蔵『吏文謄録』目録 附『国書草録』『槐院謄録』目録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------